

ともしび

4 月 号

教如上人 東本願寺創設の理念

大 桑 齊

(大谷大学名誉教授)

はじめに

教如上人は、永禄元(二五五八)年九月十六日に本願寺第十一世顕如上人の長男として大坂(石山)本願寺で誕生され、慶長十九(二六一四)年十月五日に五十七歳で亡くなりました。ちょうど四百回忌にあたる本年、東本願寺春の法要において「教如上人四百回忌法要」が三日間の日程で勤まります。実は上人の百回忌、二百回忌は勤められていないようで、そして三百回忌は御命日に歴代法要として勤められましたが、特別な法要として勤まっておられません。ですから、今回のように三日間の法要を勤めるということは初めてのことなのです。上人の初めての御遠忌ともいべき今回の四百回忌法要は、上人が何を願ったのか、東本願寺を創設されたのか、どのような思想を持っていたのかを明らかにしていく大切な機縁であろうと思います。

講題として東本願寺「創設」という言葉を使いましたが、私はこのごろ、創設というよりは「別立」ではないかと考えるようになりました。そこで、本日は教如上人による本願寺「別立」という視点で見ていきたいと思えます。

教如上人について一般的に持たれているイメージは、「織田信長と石山合戦を戦い、豊臣秀吉に本願寺門主(門首)の座を追われ、徳川家康に拾われて東本願寺を建ててもらった」というものではないでしょうか。そうしますと、東本願寺創設の正統性を裏づけるような、上人独自の理念や思想が見えないのですから、隠居させられた長男が単に本願寺を分裂させただけのようになってしまい、なんだか後ろめたい。そういう思いがずっと教団のなかにあり続けていました。それが東本願寺の事実上の開祖であるにも関わらず、これまで上人の特別な法要が勤まることになかった理由ではなからうか、と私は考えているわけです。

しかしながら、教如上人の人生をたどりますと、実は秘められた思いがぼつんぼつんと姿をあらわしています。そういうものを拾いあげていくと、上人の思想について一つの筋道が見えてきます。本日はそのような話を申しあげようと思います。

一 教如上人の門主意識

これまで教如上人がどのように見られ、本願寺別立の理念というものがどのように語られてきたのかということを、ここで振り返っておきます。

まず、大谷派教団のテキストである『教団のあゆみ―真宗大谷派教団史―』（東本願寺出版部、一九九五年）のなかで、上人は秀吉に本願寺門主の座を追われたけれども「大谷本願寺釈教如」と裏書した本尊を門徒へ下附するなど、あくまでも本願寺門主としての自覚を持ち続けていたとします。また、教学研究所編『教如上人と東本願寺創立―本願寺の東西分派』（同、二〇〇四年）でも「教如上人は本願寺門主としての自覚と責任を持つて活動された」とし、その背景には上人が親鸞聖人一流の教えを相続し伝授する教団を願われたことがあるとします。また、藤島達朗先生（『本願物語―東本願寺の歴史』同、一九八四年）も、本願寺の正嫡という意識が教如上人には強かったとされます。このように、これまで大谷派教団は教如上人を門主としての自覚と意識において東本願寺をつくられた方と捉えているわけです。

他にも名畑崇先生（『教如上人―真宗大谷派満福寺、一九九五年』が、上人が刊行された木版『正信偈三帖和讃』の奥書に「末代仏法興隆のために」とあることから、末代における仏法興隆こそが東本願寺創立の願いだとされます。実は、この奥書は第八世蓮如上人が文明五（一四七三）年に開版された『正信偈三帖和讃』の奥書に書かれた言葉なので、この刊行には蓮如上人の本願寺中興を継承しようという教如上人の強い意志が込められているのでしょう。

二 東西分派の真実

このように、本願寺を別立した教如上人の理念としては「門主意識」ぐらいしか言われてきませんでした。この高倉会館で太田浩

史先生が新説を出しました（「教如上人と大谷派樹立の精神」『教化研究』一五〇号、二〇一二年）。上人四十四歳の慶長六（一六〇二）年、前年の関ヶ原の合戦で勝利した家康が上人に再び本願寺門主となるようすすめたとき、上人がおっしゃったとされる言葉に東本願寺創設の精神があらわれているというのです。

法中の望、ただ祖師の宗意をあまねく化導するにあり（中略）
然らば諸国の末寺門徒等勝手次第嫡流前住教如上人へ帰参あるべし。領主・地頭たりとも異儀有るべからざる旨、国々へ触示し給ふ。

（『大谷嫡流実記』、『真宗史料集成』第七卷六四四頁、原文片仮名）

教如上人は家康のすすめを断り、「法中の望」つまり私たち真宗門徒の望みは宗祖聖人の教えを布教することのみである、だから再び本願寺門主になる必要はないし、寺を建ててもらう必要もない、とおっしゃる。すると家康は、それならば堀川本願寺（西本願寺）でも教如上人でも「勝手次第」、つまり門徒が自由に選べるよう取りはからおう、と約束したということです。

太田先生はこれを家康による「信教の自由」の保障と捉えますが、私はこの家康の言葉には違う意味があると思うのです。一つは、家康が教如上人の教団を認めたということ。「嫡流前住教如上人へ帰参あるべし」というのは、堀川本願寺とは違う本願寺があるということを経験したという意味なのです。

もう一つは、教如上人に帰依することを妨げてはならないと全国へ命令することを家康が約束したということです。「領主・地頭たりとも異儀有るべからざる」とはそのような意味なのです。家康がこのような約束をしたのは、秀吉の時代から上人を支持する門徒たちを大名が弾圧していたからです。石山合戦で最後まで信長と戦った上人は、秀吉政権にとっても危険な存在でした。特に一向一揆に

苦しめられた加賀^{かが}(石川県)・越中^{えつちゅう}(富山県)の領主前田家は教如派を一揆の残党とみなし、堀川本願寺を離れて上人に帰依しようとする寺院や門徒を激しく弾圧していました。越中では教如派の首謀者を捕らえて打ち首にし、獄門にさらしました(『専念寺由緒書』『信蔵絵伝』等)。家康はそのことを踏まえて、「領主は教如上人への帰依を妨げてはならない」と命令することを約束したわけです。ですからこの命令の目的は、教如派への弾圧をやめさせるためのものだったのです。

大坂本願寺退去をめぐって、あくまで信長と戦い続けようとする教如上人を支持する一派と、顕如上人を支持する一派が激しく対立し、それが本願寺東西分派の原因となります。戦国時代の本願寺教団の存立基盤であった一向一揆体制を掘り崩す権力に従うことで宗門を維持しようという方向を取ろうとしたのが、のちに堀川本願寺となる顕如派でした。このように、これからの本願寺教団をめぐって顕如派と教如派との間に大きな意見の食い違いがある。それは本山だけではなく、宗門全体において、これからの教団存続をめぐって大きな意見の対立があったことを意味するのです。

三 本願寺の家は慈悲をもって本とす

やがて教如上人は、多くの門徒に支持されつつ本願寺を別立します。その理念については、先ほどご紹介しましたように門主意識とされてきました。私も上人の伝記を書いた(『教如』『宗派別』日本の仏教・人と教え4 浄土真宗 小学館、一九八五年)ときに、やはり門主意識という視点でこの問題を考えました。そのとき、最後に書きました「本願寺の家は慈悲^{じひ}をもって本^{ほん}とす」という上人の言葉が、そのときは気づきませんでした。現在の私が考えております本願寺別立の理念の出発点になっております。

この言葉は、教如上人の側近が記録した『宇野新蔵覚書^{うのしんぞうおぼえがき}』に残されています。あるとき、明智光秀^{みちひで}の家臣であった浄念という浪

人者が上人にお剃刀^{かみそり}を願ひ出た。上人の家臣たちが「門跡^{もんせき}ともあらうお方がとんでもない」と強く反対したとき、上人はこのようにおっしゃった。

本願寺親鸞聖人の申し残され候通には、非僧^{ひそうひぞく}非俗、我ら遠行^{えんぎょう}の後、死骸^{しかい}をば加茂川^{かみがわ}に入れ、魚に与うべし、とある上は、本願寺の家は慈悲をもって本とす。

(『統真宗大系』第十六卷一〇八頁)

「死骸をば加茂川に」とは、有名な宗祖の言葉(『改邪鈔』一六、聖典六九〇頁)に拠られたものですが、「本願寺の家は慈悲をもって本とす」は、上人自身が考えられた本願寺別立の理念なのです。

わかりにくい文章ですが、私はこのように考えました。「非僧非俗」とは僧であるとか俗であるとかの区別はないという意味である。だから門跡が身分を超えてお剃刀を与えてもおかしくはない。また「死骸をば加茂川に入れ、魚に与うべし」とは、自分の身を捨てての慈悲をおこなうべし、こういう意味合いでおっしゃったのでしよう。ですから「本願寺の家は慈悲をもって本とす」とは、本願寺は身分の差別を超えた仏弟子の教団であり、身を捨てて慈悲を広めよという宗祖の教えの御座所^{ござしょ}であると宣言した言葉なのです。「慈悲の家」としての本願寺。ここに教如上人の理念があるのではないでしようか。

四 和讃書き添え十字名号

教如上人のこの理念はどのように裏づけられるのでしょうか。私は上人が下附された「和讃^{わさん}書き添え十字名号^{じゅうじなごう}」にそれがうかがえると考えました。この「十字名号」に和讃を書き添える形式は上人が独創されたものであり、如来の慈悲が光となってこの世界にはたらく姿を形にあらわしたもののなのです。

尽十方無碍光の
大悲大願の海水に
帰命 尽十方無碍光如来

煩惱の衆流歸しぬれハ
知恵のうしほに一味なり

(教如花押)

(真宗大谷派八尾別院蔵)

「帰命尽十方無碍光如来」の名号と、その両脇に宗祖の和讃(『高僧和讃』曇鸞讃、聖典四九三頁)が書かれています。50cm×20cm程度の小さなものですから、お内仏脇掛か道場で使われたと考えられ、同じ形式のものが八尾別院(大阪府)の他に佐伯善教寺(大分県)など四カ寺に所蔵されています。

十字名号そのものは宗祖が盛んに用いられたもので、蓮如上人や顕如上人ら歴代も書かれています。小型で和讃をつけたという形式は教如上人が最初です。ですから、ここに上人の理念が込められていると考えるわけがあります。

宗祖は『教行信証』行巻冒頭の大行釈で、

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。

(聖典一五七頁)

如来が我々を浄土に導くべく、この娑婆ではたらいでおられる、そのはたらきが大行であり、その大行を受けて我々の信心が生まれるわけですが、そういう如来が我々を導こうとされている姿が「尽十方無碍光如来」であり、その姿に帰命し、御名を称えるのであるとされています。

また『尊号真像銘文』ではさらにくわしく、

尽十方無碍光如来ともうすは、すなわち阿弥陀如来なり。この如来は光明なり。尽十方というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり。無碍というは、さわることなしとなり。さわることなしともうすは、衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。

(聖典五一八頁)

阿弥陀如来が放つ光明は十方を尽くし、そして我々の煩惱にさえぎられることはないといわれます。また『唯信鈔文意』にも「法性のみやこより、衆生利益のために、この娑婆界にきたるゆえ」(聖典五五一頁)と、如来が娑婆に出現して我々を救おうとしているのはたらきをあらわされています。私は、これが「尽十方無碍光如来」の意味であると考えております。

従いまして、「和讃書き添え十字名号」というのは、如来が我々の娑婆世界に出現して、我々の一切を救い取るためにはたらく姿を、名号と和讃において示されたものです。娑婆にあらわれて必ず私たちを救い取るんだという名号を、教如上人は新たな形式を創りあげて門徒に下附された。このように考えてよろしいかと思えます。

五 浄土文類聚鈔の文

そこでもう一つ、教如上人が独創されたものとして、經典から漢文四行を抜き出し二幅に仕立てた書があります。私はこれを「浄土文類聚鈔文」(以下「文類聚鈔文」と呼んでおりますが、八尾別院などは先ほどの「和讃書き添え十字名号」と三幅セットで所蔵されていますから、ここからも教如上人の理念がうかがえると思えます。

第一幅 「論主宣布廣大無碍淨信、

普偏開化雜善堪忍群生 (教如花押)」

第二幅 「宗師顯示往還大悲回向

慇懃弘宣利他利深義 (教如花押)」

(真宗大谷派八尾別院藏、以下傍点編者)

一見すると『教行信証』証巻結釈の文によく似ておりますが、少し違っております。証巻は「論主宣布廣大無碍一心(論主は廣大無碍の一心を宣布して)」(聖典二九八頁)ですが、教如上人の文は「二心」が「淨信」となっていますから、この文は『浄土文類聚鈔』(以下『文類聚鈔』)の「論主宣布廣大無碍淨信(論主、廣大無碍の淨信を宣布し)」(聖典四〇八頁)に拠られたことがわかります。この「淨信」という言葉に注目していただきたいのです。

『文類聚鈔』は『教行信証』の要約本であるとも、逆に『文類聚鈔』が先でそれから『教行信証』が書かれたとも言われています。それくらい非常によく似た文章があるわけですが、一番大きな違いは『教行信証』が往相還相の二回向と教・行・信・証という四法で浄土真宗を明らかにするのに対し、『文類聚鈔』は往相還相の二回向と信を行のなかに摂取した教・行・証の三法で浄土真宗の大綱をあらわしていることです。

また、先ほどの行巻大行釈で「往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり」とあったところが『浄土文類聚鈔』では「往相につきて大行あり、また淨信あり」(聖典四〇三頁)と、このように「淨信」に変わっているわけです。

では「大信」と「淨信」はどう違うのでしょうか。淨信とは如来回向の前行によって煩惱の身に清淨真実の信心として開かれた信であり、往相還相の二回向が一体となって称名に帰結した姿であると考えています。つまり、我々がこの煩惱の身のままで如来の前行のなかに包み込まれたとき、如来清淨の「願心」がこの煩惱の身にそ

のまま「信」となってあらわれ、如来の行のなかに包み込まれている姿を「淨信」とおっしゃっているわけです。さらには往相回向も還相回向も、全て如来清淨の願心の成就したところである。こういうことが「淨信」ということです。

教如上人は『文類聚鈔』の「淨信」という言葉に注目され、無碍光如来の十字名号としてこの娑婆に出現された如来のはたらきが、我々を煩惱の身をそっくりそのまま信心の姿に変えていくということとを「淨信」という言葉に込められ、「和讃書き添え十字名号」を書かれたのでしょう。

六 調達・闍王の逆害

そこでさらに、教如上人が『文類聚鈔』に着目された理由を考えますと、上人が二幅に抜き出した文の直前にこのような文が置かれていることに気付きます。「文類聚鈔文」と合わせて考えてみましょう。

ここをもつて、浄土縁熟して、調達、闍王、逆害を興ず(中略)達多・闍世、博く仁慈を施し、弥陀・釈迦、深く素懷を顕せり。

これに依つて、論主、廣大無碍の淨信を宣布し、あまねく雑染堪忍の群生を開化せしむ。宗師、往還大悲の回向を顯示して、慇懃に他利・利他の深義を弘宣せり。

(聖典四〇八頁)

「浄土縁熟して」の文は『聖句』として拝読しております『教行信証』総序の文(聖典一四九―一五〇頁)とよく似ています。提婆達多と阿闍世の逆害は、実は釈迦弥陀の慈悲にもとづくはたらきであると、つまり、逆害自体が如来のはたらきであるということです。総序にある「権化の仁」という言葉はこの『文類聚鈔』にはありません。

んが、同じ意味のことをここで宗祖はおっしゃっているわけです。

「十字名号」に象徴される如来のはたらきを浄土真宗の教えとして展開し、調達・闍王の逆害を弥陀・釈迦の仁慈と説かれ、続けて二幅の文が出てくる。すると教如上人は「調達、闍王、逆害を興ず」と「浄信」ということが深く関わっていると考えておられる、そのように私にはうかがえます。

「雑染堪忍の群生」である救われがたき衆生が、如来回向の不行、すなわち無碍光如来の名号のはたらきによつて、清浄真実の信心である浄信の姿によつて救われる。こういうことが『文類聚鈔』から抜き出した二幅の文によつて上人が示されようとした内容であろうと。それは、「雑善堪忍」と言われる「薄地の凡夫・底下の群生」である我々は「浄信獲がたく」（聖典四〇五頁）でありながらそのままでは必ず救われていく、そういうことをあらわしたものであり、一切衆生の救済にはたらく如来の姿を十字名号としてあらわされた、その論拠が『文類聚鈔』であつたわけです。

そのことの例証といたしまして、教如上人が門徒よりお志をいただいたお札として書かれた「教如礼状」には、お札の言葉とともにご法義のことが書いてありますが、六十七通のうち五十一通が「ことごとく」「必ず」往生と記されています。それは、煩惱、悪逆の身である我々は、この身のままで必ず往生するのだという理念を上人が強く訴えている証しだと思います。

七 秘回―理念創出の原点―

では、このような教如上人の考えはどこから起こってきたのでしょうか。私は以下のように考えました。教如上人は、大坂本願寺に籠城して信長と戦い続けた。そのとき、宗祖聖人の御座所を護るために生命を捨て、合戦という修羅の世界に生きる門徒の姿を見られ、この人々をこそ救われねばならないと強く思われたに違いないと。上人がその思いを強くしたのは、天正八年から十年にかけて

の「諸国秘回」のときであると考えます。

教如上人二十三歳の天正八（一五八〇）年四月、父・顕如は信長と和睦し、大坂本願寺を退去しますが、上人はこれに従わず、父より義絶されながらも籠城を続けます。これが「大坂拘様」です。八月、上人はついに大坂を退去し、父のいる紀州（和歌山県）鷲森本願寺に向かいます。しかし義絶は解かれず、それから約二年間、諸国に潜伏します。かつてはそれを「流浪」、逃げ回っていたとしていましたが、それは史料に見えています。「秘回」という言葉で呼ぶべきだろうと思います。上人は何人かの家臣を伴い、各地の門徒に護られながら、本来は門主の役割であるはずの消息発給や御影下附などをおこない、門徒集団を形成しながら組織的な行動をしています。秘回のなかで教如教団が生まれつつあったのですから、この旅は流浪ではないのです。

教如上人はどこを回られたのでしょうか。現在では、紀州から紀伊半島を横断し桑名（三重県）から美濃（岐阜県）に向かわれ、そこから信長の支配地を避けて越前（福井県）穴馬谷、加賀（石川県）手取谷、飛騨白川郷などの山間部を回っていたとされています。そこから近江（滋賀県）を経て信長と敵対する安芸（広島県）の毛利領内へ向かった気配もあります。

教如上人がどのような目的でどこへ向かっていたのかは正確にはわかりませんが、信長の支配地を避けながら秘回していたようです。やがて上人二十五歳の天正十（一五八二）年六月、「本能寺の変」で信長が討たれます。上人はこの事件を「天下不慮出来事」と手紙に書いていますが、信長の死をきっかけとして上人は父と和解し、秘回の旅を終えられたのです。

八 道場―僧俗一体の地域信仰共同体―

教如上人が義絶中に秘回した地域というのは、実は有数の道場地帯なのです。寺院はほとんどなく村々の道場が地域の中心となり、

僧侶ではなく村の有力者など俗人が道場主として僧侶の役割を果たすという、僧俗一体となった地域信仰共同体が「道場」です。僧侶を必要とせずに寄り合い談合をし、法義相続がなされることが江戸時代以前では一般的なあり方でした。寺院になれなかったのが道場というのはまったくの俗説なのです。そういった道場地帯を義絶中の上人は回られ、門徒たちと出遇つていかれたのでした。

また「道場主」というのは、殿原・地侍と呼ばれる、兵農僧一体の地域的小領主でもありました。この道場を中心として結成された地域信仰共同体こそが一向一揆の基盤であり、戦国本願寺教団の基盤になっていたのです。上人はこのような地域をめぐり、石山合戦を共に戦った門徒たちが僧俗未分離のまま信仰生活を送る姿をご覧になり、そこに念仏の僧伽を見出されたに違いありません。命がけで本願寺を護持した門徒たちの僧伽を護らなければならない、この人たちが必ず救われていく慈悲の本願寺をつくらなければならない、これが教如上人の本願寺別立の理念になるわけです。

その例証としまして、教如上人三十八歳の文禄四(一五九五)年、上人が隠居に追い込まれた年の翌々年ですが、上人は加州(石川県能美郡(現小松教区)「四日講惣道場」宛に親鸞聖人と顕如上人の御影を下附しております。これを「郡中御影」と呼んでおります。どこの誰が願ひ出たのかわかりませんが、能美郡全体の惣道場ですから、この郡門徒全体に下附された御影であると考えられます。

惣道場宛ですが特定の坊舎はありませんから、能美郡全体で護持する御影として下附されたわけです。私はこれを「坊舎なき御坊」と呼んでいます。御坊とは現在の別院のことですが、宗祖が「御影」となって地方へ赴かれた場所が御坊であり、「坊舎なき御坊」として道場とその門徒を支えていたのです。こういう形でたくさん道場をまとめ、そこに「御坊」を置くという教団を教如上人は考えられたのです。現在でも「直参十八道場」という、「坊舎なき

御坊」というべき地域信仰共同体が残されています。また能美郡では、現在に至るまで一帯の門徒が集まつて「郡中御影報恩講」を勤めています。

九 等身之御影―説法する宗祖―

道場群をたばねるのが有力寺院であり、それらを統括するのが御坊です。教如上人は十七カ所の御坊開設に関わつたとされていますが、本願寺―御坊(別院)―有力寺院―道場群(地域信仰共同体)という教団像が上人によつてデッサンされたのです。

その御坊には「等身之御影」が下附されました。宗祖聖人の生身に等しいという意味で、また一方で「真向御影」とも申します。本山の宗祖木像(御真影)を映したものですから真つ正面を向いています。一般の寺院では宗祖絵像は向かつて右向きに描かれています。これは右側にございます。本尊、阿弥陀如来に向かつてその教えを門徒とともに受けとめている姿であると、私は考えています。それに対して、真つ正面を向かれた御真影は私たちに向かつて説法されているのです。あたかも宗祖が生きているごとき姿である、また如来が宗祖としてあらわれた姿であるから「生身御影」とも申します。

慶長八(一六〇三)年、前年に家康より寺地の寄進を受けた教如上人は、この地に上野(群馬県)厩橋妙安寺より祖像(生身御影木像)を迎え、本願寺を別立いたします。このとき身代わりとして妙安寺に授与されたのが真向御影でした。現在でも各地の別院には真向御影がございますが、これは本山の祖像の分身であることを意味するのです。

十 僧俗分離―理念の埋没―

教如上人は、関ヶ原の合戦から十四年間に「寿像」というご自身の肖像画を七十点以上も下附しています。蓮如上人が四十年間で約

二十点ですから、これは大変な数です。しかも御坊格の有力寺院に下附するような色衣五条袈裟は数点で、圧倒的多数が黒衣墨袈裟の姿です。それまでの歴代門主像のほとんどが色衣五条袈裟ですから、そこには道場を中心とした僧侶一体の地域信仰共同体と一体になっていこうという教如上人の考え方がうかがえます。

この考え方が真宗門徒から熱烈な支持を受けた理由は、この地域信仰共同体が秀吉政権の「刀狩令」(一五八七年)などの兵農分離政策によって解体の危機に瀕していたからです。百姓は武器を捨てて農業に専念すれば後生安楽とか言って百姓から武器を取りあげ、兵農分離を押し進める。そのなかで兵(侍)・農(百姓)・僧(道場主)が一体であった関係も崩れていく。すると道場主たちは侍となつて城下へ住むか、武器を捨てて百姓になるか、それとも僧になるか、いろいろな選択を迫られていく。そこで僧となつた者には僧侶身分とともに「役」、つまり僧侶としての義務が与えられる。百姓とも侍とも違う僧侶としての「役」が課せられることで僧侶身分というものが出来あがつてくる。そうして道場主たちが専業の僧侶となりどんな寺院が増えてくる。このようにして、江戸幕藩体制のなかで僧侶身分というものが新たにづくり出され、宗門人別改帳でキリシタンではないことを保証する役目、つまり「寺請制」など独自の役儀が与えられた。そうすることによって、僧侶は地域信仰共同体から分離していく。寺号を獲得して僧侶身分の集団が出来あがつていく。この僧侶身分の集団が、実は江戸時代の宗派です。そこには門徒が含まれていないのです。

そういうことによつて結局、江戸時代には教如上人が考えたような理念、つまり僧侶一体となつた地域信仰共同体を保持して、そこでありのまま救われていくという理念が掘り崩され、幕藩体制という身分制社会のなかに埋没してしまつた。その結果、東本願寺と西本願寺はどこが違うのだということになって、ではどちらが本家でどちらが嫡流なのだということが、江戸時代を通して延々と議論さ

れることになってしまつたわけです。

結びとして―理念回復の機縁―

教如上人には東本願寺別立の理念がなかったのではなくて、その理念が幕藩体制によつて押しつぶされていったのです。しかし、それが消滅したのかというところではない。上人の理念は埋没はしたけれども失われてはいなかった。地下水として流れ続けていた。そして現在、見失われた上人の理念を回復させようとしたのが、実は「同朋会運動」であると私は思つております。

ところで、教如上人はご自分を阿闍世と重ね合わせていたのではないのでしょうか。私はそのような気がして仕方がありません。阿闍世はご存じのように、生まれる前から恨みを抱いた者です。仙人の生まれ変わりとして、やがて父を殺すだろうという予言の元に生まれ、両親から殺されそうになります。やがて阿闍世は父を殺し、母・韋提希を幽閉いたします。

教如上人も父に背いて信長と戦い続ける。また上人が門主の座を追われるのは、母の如春尼が末子可愛さのあまり策動したという説もあります。このように、両親との葛藤のなかに教如という人はいた。上人ご自身には両親に対する、世間に対する、また権力に対する反逆者であるという思いがどこかにあつた。だからこそ、上人には阿闍世への強い思い入れがあり、それゆえに阿闍世逆害の文に続けて「浄信」を述べる『文類聚鈔』に強くひかれていたのではないでしょうか。

今回の教如上人四百回忌法要というものが、教如上人の東本願寺別立の理念をあらためて確かめる出発になればと思つている次第です。以上で終わらせていただきます。

(おおくわ ひとし)

二〇一二年十二月二日
高倉会館日曜講演抄録

〈高倉会館市民講座のご案内〉

〔日 時〕 4月13日(土)

14時から16時30分まで

※13時開場

〔講 題〕 「“ボランティア”の意味」

〔講 師〕 大谷大学教授 鷺田 清一 氏

〔日 程〕 14時 開会

14時10分 講演(90分)

——休憩(10分)——

16時 対談

鷺田清一氏・蓑輪秀邦教学研究所有長

16時30分 閉会

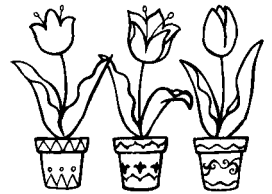
〔会 場〕 高倉会館

下京区高倉通り六条上る

(地下鉄) 五条駅下車南東

(市バス) 烏丸六条下車東

〔主 催〕 真宗大谷派(東本願寺)



クローシャ/さけび

kroša

清沢満之と高倉会館

清沢満之先生は、東本願寺旧高倉学寮の講堂である高倉会館に、度々来られていた。先生は明治二十四(一八九一)年頃には「この高倉講堂に樹心会をおこし、毎月二回信仰を中心とする修養談を交換したことが記録にのこされている」(山名義順著『聴法の華々』一〇六頁)という。それ以前にも先生は高倉学寮で宗教哲学や哲学史を講じておられるが、講義された場所が高倉会館であるかどうか定かではなかった。私は心のどこかで高倉会館での先生の講演録を探していたように思う。

そんなある日、『清沢満之全集』第六巻「和衷協同」についての解題を読んでいると、そこに明治三十四年、「石川総長会主となり、高倉通真宗大学講堂に於て、釈穀郎参集の渥美契縁、南条文雄、村上專精、清沢満之の四師と共に、大演説会を開かれたり」(前掲書三九九頁)とあった。さらに調べるとその本文は演説の綱要ということだった。以前読んだ時には気付かなかったが、この高倉通真宗大学講堂とは現在の高倉会館のことである。ともかく私は本文を読みなおした。すると改装前のことであっても高倉会館の館内に響いた言葉であると思いつきながら読んだためか、まるで初めて読む文章のように感じられた。

死の二年前にあった先生は、その講演の中で大谷派の行く末を甚だ案じておられた。清沢先生が仰るには、宗門に危機が訪れた時、絶望するかもしれないが、その時こそ「若し天下の人が皆な絶望するならば我一人なりとも残りて此大谷派の爲めに尽すと云ふの精神を懐かなくてはならぬ」(前掲書二八七頁)ということだった。

私にはその言葉が、清沢先生の強い覚悟であり、大谷派への深い愛情であると感じられ、私はその真摯な姿勢に尊敬の念を抱かざるを得なかった。

(教学研究所助手 都 真雄)

宗祖としての親鸞聖人に遇つ

【花】

教学研究所嘱託研究員 福島 和人

子どもたちが巣立って、二十年が経った。まだ核家族という言葉の珍しかった頃には、若い二人の日は、こんなに早く訪れようとは思ひもせず、ただだけに、驚くのである。

世界にも前例のない経済成長を遂げた日本の激しい変わり方は、一人ひとりの人生や家族の生活、さらには、社会状況や自然の生態系にまで及んでいることは、「身土不二」の教語に照らしても、道理の示す所である。

ところで、我が家では事情あって、五、六年前から、家事のほとんどが我が務めと相成り、一年を通して台所に立つことになっている。朝、台所からコトコトと聞こえる包丁の音で、目を醒ましていた頃の気分はとくに消えて、時に哀れをもよおすこともあったが、ほどなく、「台所も、これまた聞法の道場よ」と、心は決まってきた。

少年の頃から寺で四世代、十三人の大世帯の中で育ったので、食事の手伝いも珍しくなく、学生の頃の自炊生活も、今は助けとなっている。

気がつけば、素早く要領よく、しかも栄養も片寄ることなく作るということが、出勤前の朝食の準備の掟となっていた。

南瓜、玉葱、キャベツ、人参、大根、椎茸に玉子に竹輪、すり胡麻、出しじゃこ、そこへ時には季節の青物と前日の残飯を入れての味噌仕込みの雑炊が、三百六十五日、朝食の定番となっている。

ところで地元の朝市から、丸ごと求めてきた特大のキャベツを、上の葉から切り離しては使つて

一ヶ月ばかりが経ったところ、その真ん中あたりが脹れ出してきたのであった。そして冬が近づきキャベツにとつて替わった白菜も、春間近のころには花芽がのぞき出してきた。根を切られても、なおその芯が含んでいる養分を糧に、生命を継ぎ生きたとするその姿に、私は驚いた。生命の要は、まさに「芯」にあったのである。

「マニュアル」や「システム」の改革も必要である。だが何よりもまず家庭や学校で親や教師が、この子やこの生徒のその「芯」はどこにあるのか、と見守り育むところに、そして一方で子どもや生徒達は、自分に向けて下さっているその気持ち、を、じつと胸に手を当てて聞いてみるところに、心が通い合いそれぞれの歩む道が見つかってくるに違いない。

仏性すなわち如来なり。この如来、微塵世界にみちみちたまえり。すなわち、一切群生海の心なり。
 (唯信鈔文意) 聖典五五四頁
 との、聖人の教語を思い浮かべるほどに、いかに五濁悪世の度合いが進もうとも、人類のみならず、無辺なる衆生のすべてに通底する「いのち」(仏性)こそが私達人間にとつても「芯」であるという事実が目醒めるところにしか道はないのと思いが、年々に深まってくるのも、加齢のためとばかりとは、思われないのである。

この人間の道を、聖人との出遇いのなかに生涯を尽くされた教育者の、

私どもは、自分の生涯でただ一度、それも五十年、六十年前にお会いしただけでも、一緒にいて離れないという実感がする人があります(中略)一度も出会ったことがなくても、場合によっては生涯、自分と一緒にいる人があるわけです。

(廣小路亭「一期一会」『縁に随う』)
 との遺語が、いよいよ身に沁みるのである。

高倉会館 今後の予定

▼日曜講演▲

(開会 午前九時三十分)

四月七日「教如上人と湖北の寺院・門徒」

長浜市長浜城歴史博物館学芸員 太田 浩司

四月十四日(休会)

四月二十一日「死の傍らで」

大谷大学教授 池上 哲司

四月二十八日(休会)

五月五日(休会)

五月十二日

五月十九日

五月二十六日

岡崎教区守綱寺 渡邊 晃純
 能登教区専勝寺 佐竹 通

▼高倉会館市民講座▲

日時 四月十三日(土) 午後二時より

※午後一時開場

講演 「『ボランティア』の意味」(九十分)

大谷大学教授 鷺田 清一

対談 鷺田清一氏・養輪秀邦教学研究所長

(詳細は本誌九頁参照)

▼高倉会館同朋の会▲

四月十七日(水) 午後六時三十分より

場所 高倉会館

講師 養輪秀邦(高倉会館長・教学研究所長)

テキスト 嘆仏偈

【お詫びと訂正】

◆本誌三月号の表記に誤りがありました。四頁下段一行目、九頁上段後ろから五行目「已毘王」は「尸毘王」の誤りです。ここに謹んで訂正とお詫びを申し上げます。

* * *

お問い合わせ先

『ともしび』の内容、「高倉会館同朋の会」について

教学研究所 〇七五—三三七—一八七五〇

『ともしび』の申し込み・支払い・発送について

東本願寺出版部 〇七五—三三七—一九一八九

一九五二(昭和二十七年)十一月二十二日

編集

大谷派教学研究所

一部一〇〇円

送料

東本願寺出版部

〇一〇〇—六二七四〇四